タスク
日本語教授法

日本語教育学会編

にほんごの
凡人社
BONJINSHA

タスク
日本語教授法

日本語教育学会編

江苏工业学院图书馆
藏书章

BONJINSHA
にほんごの
凡人社

タスク日本語教授法

1995年10月10日　初版第1刷発行

著作・編集　社団法人 日本語教育学会
発 行 者　田 中 久 光
発 行 所　株式会社 凡 人 社
〒102 東京都千代田区平河町1-3-13
菱進平河町ビル1F
電話　03（3472）2240

©The Society for Teaching Japanese as a Foreign Language, Tokyo, 1995

ISBN4-89358-323-9　C3081

はじめに

日本語教育学会は文化庁の委嘱を受け、平成元年から3年間にわたり「教授活動における日本語教師の実践的能力と授業技術に関する調査研究」を行い、研究成果を初年度中間報告書（平成2年3月）、中間報告書（平成3年3月）および最終報告書（平成4年3月）にまとめて報告しました。この調査研究では、日本語教師の教授活動および授業技術とは何かを明らかにすることを目的とし、日本語教師に必要とされる実践的能力の育成ならびに教師の資質の向上について検討しました。

本書は、上記の調査研究の成果を踏まえて、内省力を備え、自己研修のできる日本語教師を育成することを目標として編纂しました。本書の内容は、書名に示されているようにタスクで構成されています。それぞれのタスクを解く過程で実践的教授能力を培い、その力を深めることを目指しています。

編集・執筆者、所属機関、執筆担当部分は以下の通りです（五十音順）。

鮎澤　孝子	（国立国語研究所）	第4章1、6、7
稲垣　滋子	（国際基督教大学）	第2章、第4章2、3、9
上野田鶴子	（東京女子大学）	はじめに
金田　智子	（文化外国語専門学校）	第3章1、2、3、第5章2
田中　幸子	（上智大学）	第1章1、2、第5章1、3、第6章、第7章
長谷川恒雄	（慶応義塾大学）	この本を読まれる方へ 第4章4、5、8、10

本書の作成にあたり、斉藤三千代氏（タイ商工会議所大学講師）、工藤節子氏（文化外国語専門学校専任講師）には貴重な資料を快く提供していただきました。また、梅田康子氏（東京農工大学留学生センター講師）には本書の内容や記述について御助言いただきました。併せてここに記し感謝の意を表したいと思います。

最後に、本書の刊行をお引き受けくださった凡人社に感謝し、計画段階から完成に至るまで励まし続けてくださった徳竹道子氏(日本語教育学会)に深くお礼を申し上げます。

なお、先述の調査研究には以下の13名が従事しました（五十音順)。

鮎澤　孝子

稲垣　滋子

上野田鶴子

金田　智子

三枝　令子（一橋大学）

澤井　康子（国際交流基金日本語国際センター）

田中　幸子

土屋　博嗣（明治学院大学）

長谷川恒雄

福地　　務（中央大学）

増田　光司（東京医科歯科大学）

柳沢　好昭（国立国語研究所）

横山　紀子（国際交流基金日本語国際センター）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この本を読まれる方へ

1. この本のねらい

本書は、教授活動のさまざまな側面がタスクを解く過程で学んでいけるよう編纂したものです。本から答えを教わるという、いわゆる how to ものではありません。タスクを介して他の人とディスカッションを行い、複数の視点からの意見を出し合い、交換することによって、自分なりの答えを見出し、問題を解決する能力を育成していくことを目標としています。タスクでは "one best method", "one best vision" を見つけることが求められているのではありません。できるだけ多面的にいろいろな局面を想定して、タスクに取り組むことが望まれます。

日本語を教える場合、「文型を基本としながら運用能力を養う」立場や「教室の中と外の世界のつながりを考えながらコミュニケーション能力を育成していく」立場をはじめ、さまざまな考え方、教え方があります。したがってタスクの解答も、一部を除き、特に用意されていません。

この本は次のような方々を読者層に想定し、編集しました。

(1) 日本語教師養成課程を受講し、これから日本語教師になろうとしている人。

(2) 既に日本語教育に何らかの形で携わっており、自分の授業を改善したいという問題意識を持っている人。現場の仕事に行き詰まりを感じており、新たな教授能力を獲得したいと望んでいる人。

(3) その他、日本語教育の教授活動のあり方に関心を持っている人。

特に日本語教師養成課程においては、実践的教授活動能力育成のための基礎的素材として、以下のような位置づけで使用していただきたいと願っています。

(1) 実践的教授活動能力は、一般に養成課程後半期に教壇実習の場で育成されることになっていますが、従来教壇実習の前提となる教授活動についての適切な指導書は限られていました。本書はこのギャップを埋めるものとして編まれ、養成課程前半期で学ぶ基礎的理論・知識と、後半期に行われる教壇実習との中間の段階で、教授活動能力とは何かということについて総合的に学べるような構成にしてあります。

(2) 基礎的理論についての知識は備えているという前提で編集しました。領域によっては教授活動能力とのつながりを確認する意味で、基礎的知識となる事項を意識的に提出しています。

(3) 教壇実習に先立つ実習活動（授業見学・授業参加）の中で授業の実際について体験したり、考察したりする際にも役立ててください。また、教壇実習の際にも適宜タスクを活用してください。

2. この本の構成

日本語教師に期待されている教授活動能力には、さまざまな側面が含まれます。日本語教師はそれが何なのか、どのように実際の授業に生かされるべきなのかなどについて、明確に意識する必要があります。

本書はそのような内容を７つの章に分けて考えました。各章の内容は、言うまでもなく互いに深く関連していますが、本という形式からの制約上、便宜的に各章に分けて掲載しました。関連事項は並行して読んでください。

(1) 各章の初めに、その章で取り上げる内容全体について紹介してあります。ここで章の概要を捉えてください。

(2) 第３・４・５章は、内容によっていくつかのユニットに分かれます。各章と各ユニットは複数のタスクによって構成されています。

(3) 各ユニット内では、おおむね基礎的なタスクから順に配列されています。しかし、全部のタスクをこなさなければいけないというものではありません。各自の必要性や興味に応じ、選択して使ってください。また、関

連のあるタスクが☞で示されていますから、それを参照してください。

(4) ユニットの終わりには参考文献がついています。

(5) 巻末にタスク解答例とヒント、参考文献一覧、タスク一覧、索引が載録されています。

3. タスクの使い方

本書をクラスやグループで使う場合には、全員で一つのタスクに取り組むこともできますが、数人のグループをつくり、グループ毎にタスクを割り当てることもできるでしょう。グループでの討論の後に全体の発表会を持つなどの方式で学習することもよいでしょう。

日本語教師の職場での研究会で本書を使う場合には、自分たちが現実に持つ課題や問題点とタスクとを結びつけながら考え、意見交換を行うきっかけとして使ってください。

一人でタスクに取り組む場合にも、自分とは異なる立場を想定しながら、できるだけ複眼的な視点を養うようにしてください。その際、特に外国語を学んだ学習者としての経験が貴重なものとなります。学習者の心理がどのようなものであったかを思い出しながら、教える立場から離れて教授活動を客観化し、あなたの教える学習者の立場を考えてみましょう。そのための糸口や観点が本書のタスクの中に提供されています。

目　　次

はじめに
この本を読まれる方へ

第1章　日本語教師として何を目指すのか …… 1
1　日本語教師とは …… 2
2　教授能力とは何か
—知識・教授技術・資質— …… 4

第2章　学習者のニーズ …… 9

第3章　授業をどのように計画するか …… 17
1　コースデザインと授業の計画 …… 18
2　教材の選び方と作り方 …… 28
3　視聴覚教材の作り方と使い方 …… 37

第4章　運用能力の育成 …… 45
1　音声 …… 46
2　文字と表記 …… 66
3　語彙の導入と広げ方 …… 77
4　文型の導入 …… 85
5　文型の練習 …… 94
6　聞く力 …… 105
7　話す力 …… 115
8　読む力 …… 125
9　書く力 …… 138
10　評価 …… 146

第5章　教室でのインターアクション …… 161
1　教室の環境 …… 162
2　練習の種類 …… 171
3　教師の介入 …… 181

第6章　授業の観察・分析・改善 ……199

第7章　問題を解決する力を持つ ……223

タスクの解答例とヒント（あるものについて） ……233
参考文献 ……244
タスク一覧 ……256
索引（キーワード） ……259

第１章

日本語教師として何を目指すのか

日本語教育に対する考え方や方法論は、この10年ほどの間に大きく変わりました。文法に重点を置くことから、コミュニケーションを体験させる方向へ。一定の方法によって一定のことを教え込む方式から、学習者自身の言語学習観を大切にする方向へ。項目化されたものを学ぶだけでなく、なぜ学ぶか、どのように学ぶかにも注目する教育へ。さらには、ことばだけでなく、異文化接触による世界の広がりをも積極的に言語教育の中に取り込んでいく方向へと。こうした変化に伴って、日本語の学習を支援する者に期待される役割や、求められる能力も大きく変わりつつあります。

あなた自身はこれからどんな形で日本語教育に関わっていこうと考えますか。そのために、どんな課題に取り組むことが必要でしょうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1　日本語教師とは

日本語を学習しようとする人たちは、その背景もニーズも、非常に多様化しています。そのため、一口に日本語教師の「仕事」と言っても、さまざまなことが含まれています。「教師」として学校や教室の中で学習者に接するだけでなく、より広く生活の場で日本語の学習を支援する機会も増えています。

「日本語教師の仕事は何か」「日本語教師はどんな役割を果たすのか」ということについて、あなたはどう考えていますか。これから日本語教師になることを目指す人も、既に日本語教育の経験を積んでいる人も、何らかのイメージを抱いているものと思います。「日本語教師として、これから何を目指すのか」……。この根本的な問いについて考える出発点として、「言語の学習を支援する仕事」とは一体何かということから始めてみましょう。

タスク1　「日本語教師の仕事」とは何か

クラスでこのタスクを行う場合は3～4人の小グループに分かれて、5分間もしくは10分間程度の短い時間を区切ってブレーンストーミングをします。

ブレーンストーミングというのは、頭に浮かんだ考えをどんどん出し合っていく作業です。あまり深く掘り下げなくてもかまいません。また、意見を統一する必要もありません。雑多なものを出し合って、並べてみることです。一人で作業をする場合にも、なるべく多面的に、いろいろな角度から考えてみましょう。

1. グループでメモをとる係を一人決めてください。係は出てきたアイディアをどんどん書き留めてください。
2. 次の二つをテーマにしてください。

(1)　日本語教師の仕事には、どんなことが含まれているか。

(2)　その中で最も大切だと思われることは、何か。

3.　制限時間が終わったら、グループのメモ係が話し合いの内容を簡単に報告してください。全体の司会者が黒板などに各グループから出されたアイディアを書いてください。

4.　グループで共通に出されたアイディア、何か違っている点などについて確認してください。違ったアイディアや意見の対立があった場合には、「なぜ意見の相違が生じたのか」について、できるだけ客観的に考えてみましょう。

5.　さらに新しく付け加えたいことがあるかどうか、考えてみましょう。

2.－(1)　日本語教師の仕事にはどんなことが含まれているか

最も大切だと思われることは

2.－(2)

2　教授能力とは何か―知識・教授技術・資質―

教師が教室内外のさまざまな局面で適切な対応をしていくためには、十分な教授能力を持つことが必要です。日本語教師にとっての教授能力とは、どのようなものなのでしょうか。また、私たちは教授能力をどのように伸ばしていけばよいのでしょうか。

日本語教師について、文化庁の報告書（文化庁1976）は53項目にのぼる「資質・能力」を挙げています。主として知識や技術として獲得されるものを「能力」とする一方で、その「能力」を支える資質・適性・心構え・態度などを「資質等」としてまとめており、それは「生来の優れた性質ばかりでなく、学習や経験を通じて身につくものを含む」としています。この「資質」と「能力（教授能力）」が具体的にどのようなものであるのか、またそれをどのように伸ばしていったらよいのかということについて、従来から日本語教育の分野において議論が重ねられてきました。「学習とはどのように行われるものか、どのように進められるのが望ましいのか」(学習観)、「教師は学習の過程にどう関与するのか、どんな能力を備えるべきか」（教師観）などの根本的な問題と深い関係があり、もとより統一的な結論を目指すことはできません。

本書では、こうした議論や研究・調査の結果を踏まえ、次のような考え方をとっています。

(1)　日本語教師が十分な教授能力を身につけるためには、

　　授業の設計や運営をうまく進める「教授技術」

　　言語の体系や学習・教授のプロセス、教授方法などに関する「知識」

この両方を備えることが必要になります。

「教授技術」とは、例えば文型を効果的に導入するためにはどんな例文をどんな順序で提示したらよいか、板書はどのようにするか、学習者にどんな発問をするか、時間配分はどうするか、というように、項目化して習得することのできるスキルのことです。「教授技術」を一つひとつ身につ

けることで、具体的な教授行動に結び付けることができます。

(2)　実際に学習者と相対する現場に立ったときに、そのような知識や技術を十分に発揮できるようにすることも重要です。知識や技術と現実の間には大きなギャップがあるからです。知識や技術を身につけ役立てるためには、教授行動の意味づけや目的を明確にすることが大切です。

(3)　日本語教育の現状を把握しながら明確な目的意識を持って教育現場の現実に対応し、適切な教授行動を自ら選び取っていくためには、知識や技術を支える確かな基盤となるもの―優れた「資質」―が不可決です。「資質」とは、具体的には次のような形で表されるものです。

・教える内容と、学習者の状況を把握したうえで、自分がどんな行動をとったらよいのかを、いくつかの選択肢の中から選び取って実行に移す力（意思決定力）
・教授・学習過程の原理をとらえて意識化する力
・理論的知識と実践的知識を結び付けて判断の基盤にする力
・自分の行っている教授活動を教育活動全体の中で位置づける力
・自分の知識や行動の状態を評価する力（自己評価力）
・自ら学び続ける力

こうした力は、わたしたちが一個の人として生来持っている個性、好奇心、柔軟性、ことばへの関心、人間への関心といったものと深く関わっていますが、日本語教師としての仕事にこれらを生かし、伸ばすためには、意識的な学習が必要です。「教えられ、伝授されるもの」ではなく、自分で見つめ、考え、発見し、納得することを通して自らの中に培っていくものです。

教師養成コースを受講している人は、模擬実習・教壇実習・授業参加・授業観察などでの経験や、授業のビデオで見聞きしたことと関連づけながら「教授能力」とは何かについて互いに話し合い、考えを出し合ってください。また教育や学習の現場に既に関わっている人は、自分や同僚の経験を振り返って、「教授能力」について考えてください。

タスク2　あなたが今までに養ってきたのはどのような分野の能力か

あなたは、日本語教師に必要なさまざまな能力を、これまでどのような形で学び取ってきましたか。どのような知識を、どのような方法で身につけましたか。教授技術については、どうですか。そして、5ページに挙げたようなさまざまな能力を、どのように伸ばしてきましたか。

できるだけ詳しく振り返って考えてみてください。また、今後はどのような分野の能力を中心に伸ばしていきたいと思いますか。

どのような方法で……	どのような知識/能力を……
今後伸ばしていきたいのは……	

タスク3　あなたの目指す日本語教師像

1.　ここでもう一度、あなたにとって、あなたが目指す日本語教師とはどのようなものであるのかについて考えてみてください。タスク1と同じように、ブレーンストーミングを行って考えてください。または、各自が考えながら紙にまとめたうえで、グループ・ディスカッションをしてください。個人でタスクをする場合も紙に書き、自分の考えていることをできるだけ明示的に文字にしてみましょう。

2.　日本語を学習しようとする人たちは、母語も年齢も、また専門、ニーズも大変多様化してきています。それに伴って日本語教育に携わる側にも、専門性が求められるようになっています。

☞タスク4、タスク6

あなたは、日本語教育のどの部分に興味や関心を持っていますか。どのような学習者を対象として教えたいと思っていますか。教室で教えることの他にも、例えば学習対象言語である日本語そのものに関する研究、教材の開発、学習者の習得の過程・教育に関する研究、教育方法の検討など、いろいろな領域があります。

自分が最も興味を持っているのは何かについて書き出してみましょう。また、それぞれの考えについて話し合ってみましょう。

教師の仕事を他の職業と比較してみると、教師は「設計者（デザイナー）」、「実施者（アクター）」、「評価者（イヴァリュエーター）」という三つの役割を同時に持つという特徴があります（吉崎1991）。つまり、授業の設計者である教師が、実践者としての自分自身が含まれている授業を対象に、授業を分析・評価し、その結果から授業を改善していかなければならないということです。吉崎（1991）はまた、教師という職業は、それだけ多様であり困難であるが、一方でこれらの役割を遂行するために、授業

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com